″被曝農業時代″を生きぬく

第19回

茨城県つくば市の㈲なかのきのこ園の飯泉孝司社長
原木シイタケの生産とともに里山再生を目指す㊦



「将来、原木シイタケを作り続けて良かったと思えるようにしたい」と語る飯泉さん

「里山再生基金」の創設へ

茨城県つくば市にある㈲なかのきのこ園で1月24日、東日本原木しいたけ協議会の会員の生産者と消費者が集まった。飯泉孝司会長は、原木シイタケづくりと切り離せない森林を除染する原資として、「里山再生基金（しいたけ用原木再生基金）」の創設を提案。次代に負の遺産を残さないため、原木を生み出す里山を自分たちの手で取り戻す方向を探り始めた。

原木シイタケを作り始めて40年以上。私にとって里山の再生は、最後の仕事と言えるでしょうね。里山で間伐がされなくなれば、日本で原木シイタケの生産自体が途絶えてしまうのですから。その原資を集めるためには、もちろん自腹を切る覚悟です。ただ、それだけではまったく足りない。ですので、まずは東電、それから消費者や林業者たちからにも寄付を募ります。

何しろこれだけの大きな事故です。風化させてはいけない。だから、東電にはお金を出してもらうだけでなく、その社員には植林に来てもらいます。お金を出すだけでは、すぐに忘れてしまいますよ。現場で汗を流してもらうことが大事なんです。それも一端植えたら終わりではない。定期的に下草刈りもしてもらう。当然のことでしょう。

里山管理の人材育成に着手

原発事故後に生産者が設立した同協議会は、原木の確保や賠償問題で関係機関と交渉を重ねてきた。その熱意は国を動かす。林野庁は昨年12月6日、安全な原木を育成する手順を示した文書「里山再生基金の実現に向けて」を飯泉さんたちに提案。同庁の新年度事業で活用できるものを具体的に提示した。

林野庁からは、里山再生について次のような5つの課題項目を示されました。

①候補地の条件設定
②候補地に応じた具体の事業計画づくり
③候補地に権限を持つ者との交渉
④作業に必要な人員の確保
⑤資金の確保

このうち①と③は解決しました。旧友にお願いして、彼が所有する5haの里山が使えるようになったんです。県の「湖沼環境税」を使い、すでに下草刈りは済ませました。これからクヌギやコナラを植林し、およそ20年後に原木として伐採したい。

それからコナラやクヌギを切り出す樵（きこり）、それを運搬する作業者、彼らのスキルを育てなくてはいけない。その研修施設を設立します。２０１３年の秋から冬にかけて里山に入り、広葉樹や針葉樹を切り出す作業者を実地で育成するつもりです。とにかく課題は多いですが、やれるこ

とからやっていく。地域の住民や林家さんのご協力を呼びかけていきたい。

加工品で需要の回復を

生産者の悩みは良質な原木の確保や除染だけではない。原発事故後から原木シイタケの需要が低迷している問題もある。国の指標値を超えたことによる出荷停止や風評被害があり、シイタケの全国消費量は原発事故が起きた11年は7万7000tにとどまった。前年対比93%である。

うちでも原木シイタケの売り上げは約5割になりましたね。それも、時間が経つごとに悪くなっている。もちろん安全対策は万全です。トレーサビリティのため、原木一本一本にはチップを付け、その色でどの産地の原木かが分かる。指標値を超えるシイタケが見つかれば、すぐにその産地の原木を廃棄するなどの対応をします。それに原木は一本一本、洗浄機で除染はしている。そうした努力にも関わらず、一度離れた消費者はなかなか戻らないんですね。前のように生や乾燥のシイタケを売るだけでは限界があるのかなと。だから、加工品もやらなくては経営が続かないと思い立ちました。

いま試作しているのはシイタケ饅頭。シイタケの粉末を混ぜてある皮で、肉厚のシイタケを包んで蒸したものです。原木シイタケならではの香りが楽しめる。これは本当においしいですよ。手作りなので大量生産が難しいため、茨城県の6次産業化の事業を活用して業務用の冷凍庫を入れました。これである程度、作り貯めできる。道の駅やパルシステムにご協力をお願いして、1個300円で販売するつもりです。ほかにニンニクとオリーブ油、塩が原料のシイタケペーストも作りました。これはパンや肉に塗って食べてもらう。10月にはつくば市内に加工場を建て、軌道に乗せていきます。



トレーサビリティのためのチップ。白や青など原木の産地別に色分けしている。

次代につなげる

飯泉さんは若手の後継者に諭しかけ、20代から50代の生産者38人でつくる「縁〜原木しいたけ復活ネットワーク」（代表・大木貴博氏）を設立させた。彼らは今後、効果的な除染を促す薬剤の選定や付加価値のある栽培法などを検討する。その成果は年間3回、会員向けの広報誌で紹介していく。

若手は横の連携が十分にできていない。これからのシイタケ生産を担う自覚を持ってもらうためにも、組織をつくって話し合ってもらえればと思った。その中で人材が育ってくれれば嬉しいですよね。

今は大変だけれど、10年後、みんなが「原木シイタケを作り続けていて良かった」と思えるようにしたい。そのためには一刻も早く、除染技術の確立と里山の再生を実現しなくてはならない。それから、消費者に買ってもらわなくては。ただでさえシイタケは菌床に代わってしまい、原木の生産量は全体の15%ほどにまで落ちてしまったのですから。いまは必死の思いなんです。

植林したクヌギやコナラが原木として伐採されるまでには、20年前後の月日がかかる。それでも飯泉さんらが立ち上がったのは、原木シイタケも里山も世代を超えたつながりなくしては、存続しえないからである。その大切さが身に染みて分かっているからである。今後も東日本原木しいたけ協議会の活動を追う。

（取材・まとめ／窪田新之助）



「縁〜原木しいたけ復活ネットワーク」の大木貴博代表の原木。「会津産」を示す「会」、群馬産を示す「群」の文字が書かれている。福島県産が出荷停止のため、飯泉さんや大木さんらは他県産の原木を利用している。

【お知らせ】
「里山再生基金（仮称）」への協力に関するお問い合わせは、3月末まで仮の事務所を置く農事組合法人・森のめぐみへ。☎0280（23）1961、またはファクス0280（23）1962。4月以降、本事務所を立ち上げる。